

幌加内町ワーホリ新聞

発行日
R3. 10. 5
8版

発行者
北大2年
鈴木結衣

湖畔の生活 1

蕎麦の花 1

ワールド 1

熊が暴く
幌加内 1

滞在日記 2

珍食 3

1ヶ月調査 3

魚 3

町探索 4

北大と町 4

コラム 4

道北・幌加内でワーキングホリデー 湖畔の半月

札幌から車で約3時間。蕎麦の作付面積・収穫量で日本一を誇る幌加内町にて、9月16日から30日まで「ふるさとワーキングホリデー」に一期生として参加した。半月を振り返る。

今回の参加経緯は、Twitterで同町のサイトにたどり着いた。長期滞在ができることや業務にワカサギ漁があることが決め手となり、すぐにネット上で履歴書を書き上げた。

日本最大の人造湖 朱鞠内湖



朱鞠内湖。気温が低く、湖から蒸気が立ち上がる「気嵐」が発生していた

幌加内町は東西に約24km、南北に約63km広がる。町役場や学校などは南に位置するのに対し、筆者が活動していたのはそこから車で北上すること約40分の朱鞠内湖。「幻の魚」イトウが生息し、澄んだ湖と満点の星空が望める場所であり、釣り人やキャンパーから熱烈的な支持を受ける。ここ一帯で釣りの管理やキャンプ場などを運営するのは非営利法人「シユマリナイ湖ワールドセンター」。その運営



フィヨルドのように入り組んだ形の朱鞠内湖。3つの川が合流する雨竜川上流に位置し、13の島が浮かぶ

他大・他学部生との交流

施設の一つであるゲストハウス兼レストランの「レークハウスしゅまりない」にて、2週間滞在し働いた。もう一人の参加者である慶應義塾大生は筆者より3日早く帰宅し、その後別口で北大の水産学部生と院生4人が訪れ活動を共にした。働いて談笑して自然と触れ合っ、怒涛の日々だったが、町役場の方を始め従業員の方々のご厚意で様々なことを体験できた。ホリデー中には稚内や網走に足を伸ばせ、毎日驚きとワクワクで胸が高鳴っていた。

一番の収穫は…幌加内町のことは元々あまり知らなかったが、ワーホリでかなりディープな過ごし方ができた。自然が恋しくなった時に帰る場所ができた。

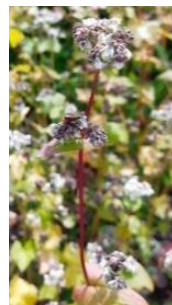


朱鞠内湖でカヤックを楽しんだ

「朱鞠内湖キャンプ場」、「レークハウスしゅまりない」、廃校を活用した体験学習施設「ふれあいの家まどか」、ワカサギ釣りや名物「サクッと！わかさぎ」の製造、釣り人のための渡船などの事業を手広く行う。中野代表を始め施設全体では約10名の従業員の方にお世話になった。役場の方々はもちろん、関わってくださった皆様に重ねてお礼申し上げます。

意外にも…

左の写真で綺麗な白い、蕎麦の花を識別できるだろうか。この見ただ目で肥やしのような匂いがする。他家受粉の植物なため、独特な匂いで数多の虫を惑わす。



せいわ温泉ルオントにて。足湯に入りながら蕎麦畑を眺望可。

Bear が Bare!? 幌加内町

- ・最寒-41.2度を記録(昭和53年)
- ・希少なイトウの産地
- ・コンビニがない(道内市町村の中で2つ)
- ・遅い春には白鳥の到来
- ・夏の雪景色「満開の蕎麦畑」
- ・冬の手前の秋「気嵐」
- ・冬に訪れる天使「ダイヤモンドダスト」



町役場玄関にて

滞在徒然日記

ワーホリとは本来、若者が異国に長期間滞在し、働いて収入を得ながら地域交流を通じて異文化に触れるというものだ。筆者が参加したのは総務省が管轄する「ふるさとワーキングホリデー」である。参加者は国内の様々な地域の暮らしを体験でき、地域は活性化を図れる試みとして、全国で開催地域が拡大中だ。行動はかなり自由が認められていた。

- 6:00 起床、軽く食べる
- 7:00～9:00 ワカサギ漁
- 9:00～10:30 ゲストハウスのお部屋の清掃
- 10:30～12:00 自由時間
- 12:00～13:00 昼食&従業員の方と談話
- 13:00～17:30 自由時間(大抵お昼寝)
- 17:30～22:00 夜ご飯&厨房の手伝い
- 22:00～ お風呂、就寝

ある日の過ごし方(ワーキングの日)



訪れた地の位置関係

大遠征したホリデー

同時期に滞在していた慶應生の運転で、稚内と網走へ行った。

上の図はある日の一日だが、サークルの会議や、務めているラジオ番組の収録をオンラインでやる際は、そちらを優先させてくれた。ホリデーも取る日数とタイミングは一任され、まるまる2日間遠征した日があった。

Day1 ロシアの近さを思った稚内

稚内では手始めにノシヤツブ岬でウニいくら丼を食べ、寒流水族館へ行った。ワカサギ漁で毎日見かけているイトウが、壁に沿う楕円形の水槽で悠々と泳いでいて、ここでもかと苦笑いをした。贅沢なことに幻を見慣れてしまったのである。「日本最北端の碑」には自転車で訪れている人が散見された。生憎の曇り空であったが遠方にはサハリンが望めた。看板にロシア語が併記されていたり、土産屋

幌加内町(朱鞠内)は道北に位置するから、この2都市へのアクセスが良い。総乗車時は約24時間で、総距離なんと800km弱である。走れど走れど直線の道が続く一方、車窓からは青々とした山や広大なオホーツク海が望め、エゾシカや狸、狐といった野生動物が急に飛び出してきたり、シカの死体に一瞬乗り上げかけたり、歓喜に悲鳴に、落ちてきている暇などなかった。



浜頓別町でやっと見つけた店「和ごころゆめ」。鯖寿司ととうきび揚げ(トウモロコシ)、頬が落ちる美味しさ

そんな遭難下、通りがかった猿払で北海道の命名者でありアイヌへの理解があつた松浦武四郎の「宿営の碑」を見た。明治の黎明期前後に「未開」の蝦夷地を調査した武四郎は、北上につれ道内大手コンビニ「セイコーマート」が密集している光景を見て驚くだろうし、ご飯にありつけないと嘆く我々を横目に町村の発展にどういった感想を抱



にマトリョーシカが売られていたりするのが印象的だった。順調に進んでいた旅も、帰路での夕飯探しにてこずった。付近の町村の規模が小さいゆえ開いている店が中々なかった。

Day2 食に、観光に、鮮やかな赤・青の景観…大忙しの網走

そこからが大変だった。阿寒摩周国立公園内の「神の子池」に行きたかったのだが、一時間かけて着いた先がそこではなく、さらに40分かけてやっと到着。底が見えるコバルトブルーの池



猿払村。「松浦武四郎宿営の地」

網走ではとにかく食べた。行きがけに上皇も御幸された能取湖の真つ赤なサング草に立ち寄り、長旅による空きっ腹を抱えつつも網走博物館はやはりおもしろく、資料をむさぼるように見た。待望の昼。監獄博物館の敷地内に付属する食堂でまずザンギ定食を、その足でつけ麺屋へ駆け込んだ。ジエラート屋で別腹の機嫌も忘れずに取る。

を期待したが、前日の雨で落ちた葉っぱが水を濁していた。それでも部分的には青くて、池の青に映えるという真つ赤なオシロコマという魚も見当たらなかったが、樹々の隙間からこちらをじつと見る何匹もの鹿があまりに神秘的で、息をのんだ。日々の過ごし方を振り返ると、働く時と遊ぶ時のメリハリをつけられたことが2週間の充足感につながった。北海道にあまり馴染みのなかった慶應大生は、「方言や暮らしなど、国内でも大きな違いがあるのだ」と思ったと振り返った。



網走へ向かう道中、奥部町付近で見かけた道路への雪崩防止シャッター。雪国ならではの光景

珍食???

幌加内で食べたもので印象に残ったのは、蕎麦の花の蜜を吸った蜂が作る蕎麦蜜や蕎麦の実がかかったアイス、フキやワラビといった山菜、鱒子や落葉キノコ、それに名前のわからない小さなイカ。あとは大きな声では言えないが、冷蔵庫に偶然入っていた「タマリソース」に感動した、さすが大阪。



「せいわ温泉ルオント」名物「そば蜜サンデー」(350円)

クマも好むという山ぶどうも取りに行った。靴とズボンがひつつき虫だらけになったが、大きな紙バッグに熟した実をひたすら放り込んだ。
落葉キノコはハナイグチなど地域によって別名をもつ。見た目は地味な赤っぽい茶色で、カ

サの内側が黄色い。コリコリしていて、風味が豊かだ。大根おろしとキノコを和えて醬油をさつとたらしただけで絶品だった。

鱒子はカラフトマスの卵。鱒もサケ科であり、味も見た目もイクラと遜色ない。むしろ、卵の皮が若干厚い故、噛むとぶちつとはじめて弾力が楽しかった。熱々のご飯にのせて食べた。

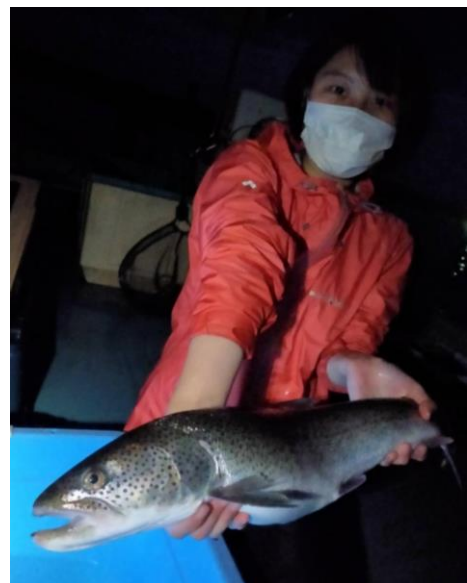
昼は従業員の方と話しながら、夜は厨房が忙しくなる前に一人で食べた。レークのテラスに出ると湖が一望でき、暗闇がずつと広がる大きな空を見ながら頭を空にして箸を口に運んだ。



奥に見えるのが朱鞠内湖。夜は気温が低く一瞬で飯が冷えていく

国内最大の淡水魚イトウ

現在イトウの生息域は水質汚染によって道内の11の河川や湖沼に限られ、絶滅の恐れがある。有名なのは天塩川や猿払川など、それに朱鞠内湖だ。レークでは定置網によるワカサギ漁が行われている



小泉准教授の第一回目のイトウの調査(下記)は朝7時から18時まで続き、終盤に参加した。釣り人による写真撮影の様子をイメージ

幻なのに厄介魚?

て、この網にイトウが紛れてしまう。イトウは保護すべき対象である一方、網内のワカサギを大量に食べてしまうため漁師側には頭痛の種でもある。網目を細かくするなどして対策を練っていくそう。

魚を見たい、知りたい

滞在中、ほぼ毎朝ワカサギ漁に参加した。網に引っかかるのはイトウの他に、フナやスジエビ(エソ)ウグイがいる。朱鞠内湖に浮かぶ島の一つの北大島では、ウグイ釣りを楽しんだ。ギョッと鳴くのに驚いた。

船上での調査 イトウの「顔」を記録する

滞在中、北大環境科学院の小泉准教授とその研究室の院生と水産学部生によりイトウ生息調査の一回目が行われた。ワカサギ漁の定置網に紛れたイトウを一時いけすに移し、半日かけて朱鞠内湖上で約50匹を調べた。イトウの顔には、個体ごとに異なる斑点がある。今回の調査の目玉は、斑点の撮影データと釣り人の撮影写真を照合する個体識別の試みだ。同湖ではイトウのキャッチアンドリリースが行われており、釣り人は釣った証にイトウの写真を撮る。これを先のデータと照合することで、同じ個体がどのくらいの頻度で釣りあげられるのか、どれくらい成長したかなどを将来にわたって記録できる。個体を傷つけずに記録できる上に、従来は娯楽のために撮られていた釣り人の写真が研究に役立つ。



測り、口腔内の寄生虫の有無を確認し、DNA解析用に腹ビレの先端をごくわずかに採取する。全長(口元から尾の先端は専門家と釣り人で測り方に違いがあるため、3種類の方法で計測するという周到さだ。イトウの体長を計る小泉先生。傷つけないように慎重に扱う

具体的調査手法は、麻酔をかけたイトウの大きさや重さを

筆者も最後の一時の間み調査を見守ったところ、長丁場で最後はヘッドライトがないと何も見えない状態だったのに、最後の一個体まで皆心底楽しそうに記録していた姿が印象的だった。小泉先生方との交流を通じて、知識の豊富さはさることながら、好きなことに対する情熱が眩しく、夜が更けるのを気にせずイトウの話に花を咲かせている様子は、何かに夢中になれることの尊さを実感させられた。

探索隊 里のそばの日本一

蕎麦アート、廃校、旧深名線

町に来て一週間が経とうとする頃、

朱鞠内から南下して幌加内町の市街地へ行った。メイソンは役場の方に町を案内してもらい、蕎麦打ち体験をするということだったが、その前に町を軽く巡った。ここ幌加内町は、過去に国内最寒気温-42.1度を記録し毎年積雪量も膨大である。市街地の

お店には大抵、道内最大積雪量の324cm(町記録)に印が書いてあった。

偶然入った公共施設に「R11 深名線の展示コーナー」があった。国鉄時代の黒板に手書きの運賃表や各駅の紹介パネルなどが展示され豊富な木材の発送を支えていたことがわかる。役場の方と合流すると、廃校

(旧政和少)を活用したアート空間に行った。

ステンドグラスやお手製ウェディングドレス、溶銃して作られた「ピタゴラ装置」など、子供から大人まで楽しめる空間。投げられた北海道弁で捨てられたの意布や除雪機の部品を生まれ変わらせるなどSDGsを取り入れているのも見どころだ。



ピタゴラ装置。鉄製機械と木製球の奏でる涼しげな音が楽しい

お待ちかねの蕎麦打ちでは、まず「初代蕎麦打ち名人」が見本を見せてくれた。幌加内町では例年蕎麦打ち大会が開催されており約20年前の優勝者だという。手際の良さに見とれている間に説明が終わってしまった。一人一セット道具が用意され、役場の方のサポートの下蕎麦打ちが始まった。同町は「そばの

里」を称する通り、「全国高校生そば打ち選手権」では幌加内

高校が連勝中で、役場職員は蕎麦打ちの資格をもつ。

蕎麦を何とか形にした後は、包丁で麺を細く切る。これが難しかった。昔作ったうどんのような麺からは格段に成長したが、名人の細く長い麺と比べてしまったらその差は歴然としていた。

美食では、自分の蕎麦もおいしかったが、名人の麺のコシには驚かされた。生地をどれだけ力強くこねられていたかがここにでていた。他の人の麺も味わうことができ、互いの麺をほめあいながら食べる蕎麦は本当においしくて、主に名人の麺を5杯くらい食べてしまった。



自作蕎麦。幌加内町のエプロンを着用

北大と幌加内町

滞在中町と北大とのつながりを感じる機会が多々あった。かつて朱鞠内湖は、湖を囲む北大の雨龍研究林の一部だった。ダム建設のため1928年に民間に払い下げられ、日本最大の人造湖に。ちなみに払い下げ金で建てられたのが理学部である。

同研究林は現在も20km²の広さをもち、アカエゾマツの原生林やイトウの調査が珍しい。実際に演習施設で中路林長から説明を受けたが、劣悪な環境下で育った木の年輪が非常に狭いことに驚かされた。

近年同研究林内も通っている川で氾濫が生じている。演習林内で林道を作るためには当時川の流れを矯正せざるをえなかったが、町からは自然のままに行きさせるべきだという声が上がっている。道内に多く研究施設をもつで地域住民の理解を得ることが重要だろう。

コラム

振り返るとこの時期は毎年印象深い。7年前は、ひまわり運動勃発時の香港にいた。街中が非常に混乱していたのを覚えてる。4年前はイギリスに今回と同じ2週間滞在し、多くを学んだ▲しかし今回、主役たる自分が変わってしまったような気がした。胸がいっぱいになって世界から取り残されるような感覚が薄かった。驚きと興奮で打ちのめされているのに、息ができていて自分に戸惑った▲「たった4年間で、生意気にも刺激に対して冷静でいる余裕が生まれてしまったらしい。これから、年を取っていくと、見聞の蓄積が増えていく。それが今の私にはいささか恐ろしい。興ざめである」。滞在中の雑書きた▲一方で、今回自分はまだまだ青いことも痛感させられた。仕事を要領よくこなすのに苦戦したのもそうだし、将来への考えについてでもそうだ▲今回従業員の

方々を始め、早期退職された元記者さんや北大の先生、レークのお客さんにまで自分の将来について相談をした▲人はみな面白いことが好きでも、行動に移せる人は少ないこと。世界の変化には敏感になるべきだけど、それでもやりたいことがあるなら進むのも一つの道であること。そして何より、失敗しても自分の好きなことを信じていればやり直す機会はあること▲もちろんこれらはヒントでしかなく、「若者が簡単に変えられるほど社会は甘くない」。社会の構造にはまりながら、世情に通じながら自分の好きなことに向き合うことが要とわかった。そう思うと私の変化は悪くないのではないか▲「最近、世界の解像度がぐっと上がった気がする。それは間違いなく経験値の賜物であり、世界はより『正確に』、『鮮やかに』映るようになった。私は落ち着きを抱えてそんな世界に飛び込んでいく。こうつけたして、21の秋、開幕。